# デキる妹はいかがですか？

## 淫魔な妹とHEIの子作り

小説 089タロー
挿絵 ながのろ

2DB 二次元ドリーム文庫

序章　ツンな妹と甘えん坊な妹　006
一章　妹たちのエッチな正体？　022
二章　妹たちはエッチな淫魔？　060
三章　淫魔な妹は我慢無理！　094
四章　ツンな妹も疼いちゃう！　128
五章　淫魔な妹は子作り（お兄ちゃん限定）に夢中！　173
六章　淫魔な妹とフルムーン子作り！　206
終章　淫魔な妹はボテてもラブエロっ♥　257

# 人物紹介

## 育島（いくしま）アンジェ

文武両道の優等生で人当たりもよく友達が多い美少女。スタイル抜群で男子人気も高い。だが、兄の真にはツンツンしている。

## 育島（いくしま）ルテア

明るく活発なアンジェの妹。大好きな真にたびたび大胆なスキンシップをする甘え上手な小悪魔キャラ。

## 育島真（いくしま まこと）

何よりも家族の結びつきを大事にするちょっとズボラな面もある少年。私生活でアンジェによく怒られている。

ルテアは両腕で首を抱いたまま、くりっとした瞳を近づけてきた。
「ルテアたちね、出してもらってから、においで調べてるの。濃厚で魔力タップリで、とっても美味しそうな……ルテアたちでもデキちゃうくらいの精液……」
鼻先にある金色の瞳が、いつもより輝いて見えた。
その深い色は、なんだか吸いこまれそうで……頭の芯がゾクッとするような感覚を得た。
（なんだ、ルテアが――いつもより色っぽく見える。格好とかじゃなくて、雰囲気が……）
かすかに潤んだ瞳が、堪らなく保護欲をくすぐってきた。ちょっぴり照れて微笑む仕草が、がんばって男の子を誘う初心な女の子を思わせる。瞳の大きなあどけない顔立ちが、余計に心にぐっときた。
気づけば細い右手の指が、胡坐をかいた股間に触れてゆっくりとさすり始めている。
「ルテア、おい、ちょっと……」
「じっとしてて。お兄ちゃんのおちんちん、ルテアが触ってあげちゃうから……」
黒いグローブに包まれた指は、柔く引っかくようにして陰茎あたりを刺激してくる。動きに少し躊躇いはあるが、それは間違いなく愛撫だった。
「なにやってるのよルテア、そんな、アニキのをなんて……おまけに直接……！」
固まっていたアンジェが慌てて止めに入る。けれどルテアは兄の膝に座ったまま、なおも指と手を動かしてくる。
「だって……お兄ちゃん、だもん。いつもみたく夢だけで出させちゃうの、悪いもん……」

よく分からないが、こうやって触るのは初めてみたいだった。指は小さく震えているし、ぎこちなさも感じる。

それでもルテアは、兄の股間が反応してくるのを嬉しく思うようだった。

「ぁ……お兄ちゃん、おちんちん、硬く……なってきた。分かるよ、ズボンの向こうでおちんちん、びくって……」

恥ずかしいが、股間は着実に硬度を増してきていた。決して強くない、くすぐるような指先での愛撫。けれどそれは軽くでも性神経を刺激し、血流を速くしていった。

もちろん真もやんわりとやめさせようとした。妹相手にこんなことだめだと思う。でも不思議と身体に力が入らず、持ちあげた腕が彷徨っていた。

（ルテアの触り方、なんか、いやらしい……焦らすみたいで、もっと、ほしく……）

指先で触るだけで、掌は決して触れてこない。膨らんできた裏筋の辺りをこちょこちょとくすぐるばかり。かと思いきやススッとおりて、陰茎の裏側をソフトになぞってくる。

ぎこちなくも欲望を誘うような、不思議な刺激に真は戸惑う。

「る、ルテア、だめだってほんと、ああくそ、なんて夢見てんだ俺っ」

「そうだよお兄ちゃん、これは夢……ルテアとお兄ちゃんとのエッチな夢……だから遠慮なく感じちゃっていいんだよ」

そう囁くと、ルテアは彷徨っていた右手を握った。そのまま口元に運ぶと、なんと人差し指をくちゅっと口に含んだ。

「うあっ、る、ルテア、指しゃぶって……ああ……」
「んっ、くちっ……お兄ちゃんの指、んむ、あったかい……」
濡れた舌が、アイスでも舐めるように指に纏わりついてきた。唾液を塗しぬるぬるにして、ゆったりと唇でしごいてくる。ゾゾッとするような感覚が走り、右手が思わず震えた。
「あむっ、お兄ちゃんの指、綺麗……ちょっぴり汗の味、美味しいよぉ……」
「ああそんな、指なんてしゃぶられて俺、ああっ、ほかの指もぉ……！」
舌はさらに指の股にまで伸びてきた。谷間の部分を舐めて刺激すると、今度は中指もぱくっと咥える。爪の中まで舐めるようにして第二関節まで唇でしごかれる。
その間にもルテアの右手はズボン越しに陰茎を触り、動きを小刻みにしていった。
「ちゅくっ、むふぅ……お兄ちゃん、おちんちんすっごくおっきくなってきた……気持ちいい？　ルテアの指とお口」
真は自然と頷いていた。夢という単語が頭にあったからかもしれない。こんなことあり得ない。だから流されてもいいと自己弁護したのかもしれない。
（気持ち、いい。もっと触ってほしい。くぅ、立っちまうの、もう我慢できない）
夢なのに感覚はいやにはっきりしていた。硬くなった肉棒は、もうくすぐり程度では満足できなくなっている。腰が勝手にモゾモゾするのを止めることができなかった。
そんな兄の反応を見て、ルテアは――半目で流し目を作った。
「お兄ちゃん……おちんちん、見てもいい？」

見た瞬間、真はまたゾクッとした。
こんな表情は初めて見た。長い睫毛を軽く伏せて誘うみたいに笑うなんて。頬も桃に色づいていて、エッチな雰囲気ばっちりだった。
あの無邪気な笑顔の奥に、こんな表情を隠していたなんて。興奮よりも驚きが先立ち、舌が回らなくなってくる。
その隙を縫うかのように、細い指先がスス……とズボンに忍びこんできた。
「お兄ちゃん……見ちゃうね？　大好きなお兄ちゃんのおちんちん……ひゃっ！」
パンツの中まで入った指が生の肉棒に触れてきた。途端、妹は小さな驚きの声を漏らす。直接触れるのも本当に初めてみたいだった。ルテアの目に一瞬だけ普段が舞い戻る。処女らしい怯えの気配が、金の眼差しに浮かんでいた。
だがそれも少しの間。亀頭の硬さを確かめるように指先でくるりとエラをなぞると、両手を入れてゆっくりとズボンを引き抜いていった。
「はぁ……！　お兄ちゃん、すごい……おっきい……！」
「や、やだ、これ……ほんと、大きい……前に見たのと全然違う……」
オロオロしていたアンジェさえもが、そそり立つ肉棒に見入っていた。
自慢じゃないが、真のペニスは平均よりも大きかった。男子ならば一度は大きさを気にする。修学旅行で見せあったときに大きいと驚かれ、自覚だけはしていたのだ。
「すごいそり返ってて、あんなに膨らんで……こんなのが中を……ご、ごりごりって……」

急にアンジェは腰を震わせ、尻尾をゆらゆらさせ始めた。ケリくらい飛んできそうな場面なのに、まっ赤な顔してペニスから目が離せないでいた。

「これが、お、おちん、ちん……なに、この感じ。身体、熱くなって……やだ、胸が……」

グローブに包まれた両手が、豊満な胸の谷間にぎゅっと押しこめられた。心なしか先端部分がぴんと尖っているように見える。呼吸は少し速くなって、こぼれ落ちそうなたわわな乳肉をゆさっ、ゆさっ、と揺すっていた。

「すごいね、お兄ちゃん……こんなだったなんて、ルテア知らなかったよ」

ルテアは膝からおりて、間近で肉棒を見つめてきた。

「おっきいおちんちん、ちょっと怖いけど……かっこいいよ。男の子って感じするもん」

彼女の呼吸も少し速くなっていた。裸の肩と、ほとんどむき出しのおっぱいが、ほんのりと肌を色づかせながら小さく震えていた。

その彼女が四つんばいになり、肉棒を目の前にして照れ臭そうに見上げてくる。

「はぁぁ……いい……におい。お兄ちゃんのおちんちん、とっても素敵なにおいするよ。こんなの、初めて……」

「ううう、妹におちんちん見られて……夢なら覚めてくれ、恥ずかしすぎるっ」

「うふっ、まだだめ。おちんちん気持ちよくなってからじゃなきゃ、起こしてあーげない」

ルテアは言って、また流し目を作った。無邪気そうに笑う口元はあどけなさが強くある。なのにその笑みは不思議と艶めかしく、小悪魔的な色っぽさを感じた。

「うふっ、お兄ちゃん……触っちゃうね？」
――すぅぅ……きゅっ。すり、すりっ。
軽く握られ小さく擦られると、真は思わず呻いた。
（ヤバっ、これ、気持ちいいぞっ。グローブの質感が、またなんとも……！）
生肌ではないが、直接の刺激はやっぱり快感だった。
きっと焦らされたせいだろう。指で優しくくるむようにして上下に軽く擦られるだけでも、じんじんとした甘い痺れが芯の部分まで駆け巡る。エラもさっきより横に開いて、感じていることをはっきりと妹に教えていた。
小さく身動ぎする兄を見て、ルテアは嬉しそうに笑う。
「気持ちいいお兄ちゃん？　うふっ、いわなくても分かるよ。ここはルテアが作った夢の空間。男の人の出したいって感じ、ちゃーんと伝わってくるもん」
まるで快感が分かるみたいに、ルテアはゆっくりと握った右手を動かした。
「あはぁ……おちんちん、ぶるぶるしてる。すっごく硬くなって……はぁ、ほんとおっきい、ルテアの指じゃ握りきれないよ」
小振りな掌が上下にずれて、太い陰茎を刺激してくる。
まずはサオを緩くさすり、直に触れられているという感覚を存分に広めてくる。ちょっとじれったいピリピリとした甘い痺れが、肉棒の感度をまた一つあげていった。
それだけでペニスはびくびく震えたが、その一方で今度は先端が不満を覚える。こっち

も触ってほしい。一番敏感なのはこっちだ。そんな欲求が意識と股間に蓄積してくる。
それを見計らったように、ルテアは左手をそっと亀頭に添えてきた。
「うふっ、お兄ちゃん、こっちも……してほしい？」
「う、ぐっ、それは……」
「してほしいよね？　お兄ちゃんのエッチな気持ち、ルテアの耳に聞こえてくるもん。こっちが一番弱いからって。いっぱい触ってほしいって」
その声は少し弾んでいて、エッチなプレイを楽しんでいる雰囲気だった。
真はますます狼狽する。あの無邪気で甘えん坊なルテアが、こんなに楽しげに手コキするなんて信じられない。きっと処女に違いないのに。不慣れなことは間違いないのに。
けれど快感は確かなものだった。右手でサオをしごきながら左手で亀頭をくすぐられると、強い媚電が尿道を走り、鈴口からじわっと何かが溢れでた。
「あん、お兄ちゃん、先っぽからお汁出ちゃった……手、ぬるぬるぅ……」
掌についた透明な汁を、ルテアは興味深げに見つめた。
そしてその汁を、舌でぺろっと舐め取る。
「る、ルテア、おまっ、舐めるとか……！」
「んっ、はふぁ……美味しい……なにこれ、お兄ちゃんのお汁、すごく美味しいよぉ……」
そんな彼女はいつになく挑発的で色っぽかった。顔は変わらず愛らしくて楽しそうに笑っているのに、横目でこちらをチラリと見ながら舌を伸ばして掌を舐める。

小悪魔的な色香を放つ初めて見た妹の表情に、真は眩暈がしそうなほどドキドキした。
「なっ、なっ、ルテア、アニキのを、そんな……」
「お姉ちゃん、お兄ちゃんのお汁、ほんとに甘いよぉ……こんなの初めて。舐めただけなのに、お腹、きゅん、きゅん、ってぇ……」
ほとんど裸の白いお尻をルテアはふりふりと揺すり始めた。尻尾も歓喜しているように、うねうねと動きだしてきた。
「においも甘いぃ……頭ん中、ぽーっとしてきちゃう……ルテア、なんだかすっごく……」
金の瞳が物欲しげに肉棒を見つめる。好奇心と欲望の混じる、熱の篭った眼差しだった。
「すっごく素敵……お姉ちゃんも触ってみてよ。お兄ちゃんのおちんちん、ほんと、すっごいからぁ……」
「い、いや、いやよそんな！　わたしアニキのなんて……ほかの人のだって、まだ……」
「お姉ちゃんだってほんとはほしいんでしょ？　ルテア、分かるもん」
言われてアンジェは赤面のまま口篭った。眉尻はあがっていたものの、不思議と反論はしなかった。
「はふぁ……お姉ちゃんだってルテアと一緒だもん。ほんとに素敵なおちんちんだと、きっとこうなっちゃうもん……」
「それ、は……でもっ……」
「ルテア、お兄ちゃんのこと大好きだから……我慢、無理かもしれないよ。ルテア、この

ままお兄ちゃんと……」
「だ、だめよ、それはだめ！」
ルテアの挑発に焦ったアンジェは、その隣に四つんばいで並んだ。
「わ、分かったわ。出しちゃうだけ……それだけ、だから……」
「あ、アンジェ、お前までなにを……ううっ！」
真はまたしても呻いた。アンジェまでもが一緒になって肉棒を握ってきたのだ。
それもこちらは亀頭の方を、だ。サオはルテアが握っているので必然的にそうなった。
そして亀頭がこすられると、より強い甘電が陰茎を駆け抜け、
「ううっ、アンジェ、そんな……待てって、今そこされると、俺っ……！」
「う、うるさいわね！　いい、痛くない程度に、し、してあげてるじゃない……！」
実際、アンジェのタッチは怒声に似合わず優しかった。そっと両手で亀頭を包みこみ、形を確かめるようにおずおずと触れてくる。力加減が分からないせいか、さする仕草はとても丁寧なものだった。
そのソフトタッチと緩やかな摩擦に、けれど亀頭は大いに悦びパンと張って鈴口を開く。
「あぁなによ、こんなに硬くして……いやらしいツユ、手についちゃう、じゃない……」
やっぱり恥ずかしいのだろう。触れる両手は小刻みに震え、喉は何度も鳴っている。エロい服装をしてはいても、潔癖なのは変わらないみたいだ。
それでも不思議とその手は離れようとしない。頬はまっ赤で強張ったままだが、必死に

ペニスを愛撫しようとしていた。
「あん、お姉ちゃんずるぅい、ルテアも先っぽ触りたいのにぃ……！」
「どっちでもいいじゃない、早く終わらせたいんだから……はぁ、なに、このにおい、ほんと、甘い……」
その一方で、彼女もまた小鼻をヒクつかせて、赤い瞳を揺らし始めた。
「すんすん、はぁぁ……いやらしい、におい……鼻腔にじんじんきて、なんなの、このおツユぅ……」
戸惑っているのか、手についたカウパーから彼女は顔を遠ざけようとした。けれどルテアと同じく感じるものがあるのだろう。震えながらも、もう一度恐る恐るにおいを嗅ぐ。
するとその表情が、少しトロンとしてきた。
「はあぁ、こんなの、ほ、ほんと、初めてぇ……！」
「はぁ、はぁ、アンジェ、ルテアも、お前たち、一体……」
「ち、違うの、これにはわけがあって……はぁぁ……！」
アンジェは小さく首を振って表情を隠そうとした。が、赤い髪から覗くその目はしっとりと濡れて目尻が下がり、薄く開いた唇からは熱っぽい吐息が漏れていた。
「はぁ、はぁ、やだ、お腹、熱くなって……胸も熱くぅ……はぁん……」
腰のくびれが小さく捩れると豊満な胸も小さく揺れた。この角度だと、胸の谷間がちょうど見える。むき出しの谷間は互いにぶつかって、ほとんどあらわな白い乳肉に細やかな

波を作り出した。
（え、エロい。アンジェのおっぱい、すごい大きい）
前屈みになっているせいか、おっぱいは余計に大きく見えた。かなり重さがあるはずなのに不思議と形は崩れたりせず、ごく小さなカップの中で見事なロケット型を保っている。そのくせお肉は柔らかいらしく、わずかな揺れだけでも小さな波紋を浮かせていた。
そのおっぱいと悩ましい表情は、普段の彼女とは打って変わったエロさがある。ルテアと違って乗り気じゃないのが余計に艶めかしく見えた。
結果、ペニスはますますいきり立ってしまい、
「はぁぁ、おツユまた出てきてぇ……手、ぬちゅぬちゅする……ほんと、いやらしいんだからぁっ……！」
「アンジェ、くぉ、動きが速くっ……！」
亀頭を包むアンジェの両手が次第にピッチをあげてきた。早くイカせたい一心なのか、濡れた瞳は食い入るようにペニスを見つめる。それでも手つきはなおも優しく、揉むような動きも入れて小刻みに亀頭を刺激してくれた。
「はぁ、はぁっ、においも強くなって……なんなのこれ、いつもと全然違う……精液じゃないのに、こんなにおいするなんてぇ……！」
「でしょ、お姉ちゃん。お兄ちゃんのおちんちんとお汁、びっくりするくらいいいにおいだもん……！」

ルテアも笑って手コキのピッチを速めてきた。両手を組むようにサオを握って、少しでも隙間がないようにしっかりと上下に摩擦してくる。

「あぁんすごぉい、おちんちんくちゅくちゅいってるぅ……お汁、多い……におい、エッチだよぉ……こんなの初めて、生のおちんちん初めてだよぉ……！」

「だ、だめだ、そんなしたら、俺、マジに……ううっ！」

一気にやってきた射精感に真は背筋を震わせた。

二人の手コキにもう焦らしや手加減はなかった。本気でイカせようと熱烈にペニスをこすってくる。姉妹なためか不思議とリズムもぴったりで、互いの邪魔をすることなくスムーズな摩擦となっていた。

大量のカウパーが潤滑油となり、グローブ越しでも痛みなどなかった。エナメルっぽい質感は、むしろきゅっと吸いつくようで自分の指より気持ちいい。そもそも女の子の華奢な指は、男のゴツさなど比較にならない素敵な甘美感を生みだしていた。

（うそみたいだ、あのアンジェやルテアに、おちんちんしごいてもらってるとか……ヤバい、サオとカリ一緒にされて、マジで感じるっ……！）

とても夢とは思えないくらい強い愉悦を感じていた。生憎（あいにく）と真はバリバリの童貞。ペニスを触られたことだってない。綺麗な女の子相手ならいいといつも夢見てはいたが、まさか妹とだなんて思わなかった。

だが妹たちは、その綺麗な女の子の範疇に見事はまっている。目も眩むような美貌とス

タイルのアンジェ。小柄で愛らしくて見ているだけで楽しくなれるルテア。ずっと兄として接してきたが、魅力的だと感じない時期は今まで一度もなかった。
その二人に、たとえ夢でもこんな快楽を与えてもらえる。しかもエロい格好と表情で。それを思うと、せめて今だけは妹たちを独占したくなった。
「はぁ、はぁ、アンジェ、ルテアっ、俺もう……イク、イクからっ……！」
「あはぁ、お兄ちゃんイってぇ、いっぱい、いっぱいぃん……！」
腰をはねさせびくびくすると、ルテアがサオをきゅっと握って右から頬ずりしてきた。
「お兄ちゃんのおちんちんあったかい……大好きなにおい……出して、びゅーって……！」
「はぁ、はぁ、早く、出しなさいよぉ……！」
さらにアンジェも左から頬を寄せてきた。
「アニキとこんなことするなんて、夢にも思ってなかったんだからぁ……んあっ、すごいにおいっ……早く、早くぅぅ……！」
まだ抵抗があるみたいだがアンジェは鼻先を亀頭に触れさせた。目を閉じすーっと吸いこむ表情は恥じらっているのに物欲しそうで、すごく可愛いし堪らなくエロかった。
（アンジェとルテア、すごくほしそうでエロい顔っ！　だめだ、もう出るっ！）
お尻をふりふりと揺すりながら切なげにペニスをしごく妹たち。その艶めかしい姿に昂らされながら、真は我慢をやめ、肉棒を大きくしゃくりあげさせた。
「アンジェ、ルテア、くうっ、イクっっ！」

それを言われるとどうにも弱い。諦めるしかなさそうだ。
（まあいいか。それに、これでルテアもいい身体してるんだよな。っていうか、生脚と太腿いいっ……）
妹たちはとっくに私服に着替えている。まだ制服なのは真くらいだ。隣のアンジェは白のカーディガンにデニムのショートパンツという姿だ。
で、ルテアはというと、黄色い七分袖のカーディガンに、紺のフリルミニスカートという格好だ。靴下は履いているものの、ミニの裾から伸びたおみ足は白い肌が全開だった。
そのすぐ目の前に真は正座している。なので当然、ふっくらとした生太腿に自然と目が行くわけで。
「うふっ、お兄ちゃん、ルテアの足見てエッチな目してるー」
ルテアは目聡く気づいて、スカートの裾を摘んでギリギリのところまでアップさせた。
（ううっ、パンツ見えそう。太腿もなかなか美味しそうで……ヤバ、興奮してきた）
これでも健康な青少年。お尻やおっぱいや太腿を見れば、すぐにムラムラできてしまう。そもそもルテアの白い肌は日本人離れしたきめ細かさで、間近で見ると触ったり頬ずりしたくなるくらいだ。
「うふっ、お兄ちゃん、ルテアの太腿とかお尻、触りたい？」
「う、うん。……触りたい」
「うふっ、だーめ。先におちんちん出してくれなきゃ」

すでにスイッチが入っているのか、ルテアの表情と声音には、小悪魔的なものがあった。焦らされていると分かって真は少し唸ったものの、座ったままズボンとパンツを脱ぐ。

「あはっ、お兄ちゃん、もう少し硬くなってるー。ルテアと子作りしたいんだね。嬉しい……でもまだだよ。おちんちんもーっとかっちかちにしてくれなきゃ」

そう言ってルテアは目の前に座ると、両足を開いてガニ股になり、足の裏で陰茎を挟みこんだ。

「こうやってこすこすしちゃうね。今日はルテアの足で気持ちよーくしてあげちゃう」

噂に聞く足コキというやつだった。足の裏で陰茎をこするちょっとした羞恥プレイだ。

真は少し驚いたものの、じきに快感を覚えてきた。少し蒸れた温かい足裏とサラリとした靴下の感触が、思いのほか気持ちよかったのだ。

（ヤバ、これ結構いいかも。自分じゃなんにもできないのが情けないけど、そこが逆に興奮するっていうか、じれったいからこそ感じやすいっていうか）

そんなプレイをどこで知ったのか疑問だが、ルテアの足捌きは意外にも上手だった。絶妙な力加減で挟みこんで圧迫し、土踏まずの窪みを使って巧みにサオをしごいてくる。

「お兄ちゃん、おちんちんぴくぴくしてるぅ。ルテアの足で感じちゃう？」

「う……うん。感じちゃう……」

「うふっ、出そうになったらいってね。お兄ちゃんの子作りザーメンは、ぜーんぶおま○こで中出しごっくんしちゃうから♪」

すっかり板についてきたのか、普段は可愛くて甘えん坊なのにエッチのときは小悪魔そのものだ。こんな小柄で愛らしい悪魔に玩ばれていると思うと、不思議と興奮してされるがままでもいいと感じる。

同時に真の目は、しごくたびに揺れるスカートに釘付けだった。

（ううっ、見えそうで見えない。もうちょっとあがればパンツ見えるのに……）

意識してかは分からないが、フリルミニはぎりぎり陰部を隠していた。太腿が動くたびふわりと揺れて付け根が見えそうになるのに、あと一歩が足りない時間が続いた。

そんな生殺しの状態で足裏にサオをまさぐられると、快感と一緒に切なさが募ってくる。

「る、ルテア、お兄ちゃんちょっと……出そうかも。でもその前に、ルテアのおま○こも見たいかな……」

「うふっ、見たい？　ルテアのおま○こ。――いいよ、見せてあげるね」

大きな瞳を半目にすると、ルテアはくすっと笑ってフリルミニの裾をあげた。

その奥を見た瞬間、真はおおっ……と目を見張る。

「る、ルテア、お前っ、パンツ、穿いてない……！」

「テヘッ。おウチじゃいつでもお兄ちゃんと子作りエッチできるようにって」

そう。捲られたミニの奥は、白い恥丘が丸見えになったノーパン状態だった。

きっと姉のことなどなくてもエッチする気満々だったのだろう。妹の金の瞳には、早くも期待と愛欲の色が浮いている。

ルテアは器用に足コキしながら、太腿を開いておねだりしてきた。
「お兄ちゃん、ルテアのおま○こ……ちゅっちゅして？」
興奮してるのか、縦に走った薄い溝にはうっすらと蜜が浮いている。姉のそれにも負けない芳香がぷーんと漂って鼻腔を刺激する。
真は鼻息を荒くし、前屈みになって淫唇に吸いついた。
「きゃんっ！　はうん、お兄ちゃぁん……！　おま○こにちゅー、気持ちいいよぉ……！」
「ちゅ、ちゅちゅっ！　ルテアのおま○こも美味しいよ、レモンみたいに甘酸っぱいっ」
「やぁん、お兄ちゃんってばぁん……！」
ルテアはすぐさま甘い声で鳴き始めた。夕べも一発ヤったというのに身体はとっくに疼いているらしい。唇を伸ばしてキスしまくると、薄い粘膜が気持ちよさげに収縮をした。
真もまた、たちまちクンニに夢中になった。自分の精液を甘いと言うが、ルテアの愛蜜も抜群に甘い。ハチミツとレモンを混ぜたような甘味と酸味が舌を刺激し、もっともっと飲みたいという渇きにも似た欲が湧いてくる。
しかもルテアは足コキを続けたままだ。こんな体勢でよくも、と思うほど、器用に足裏でサオをしごき立てている。興奮と快感で先には汁が浮き、足の指がそこをこねると白い靴下をぬるりと汚した。
「な、なによ、そんな変態行為っ……そんなの、見せちゃって……」
黙って見てるしかないアンジェは、頬を染めながら太腿をもぞもぞさせた。

「アニキもなによ、足なんかで興奮して……」
「はぁぁん……うふっ、ルテアの足だからだよね、お兄ちゃん？」
「！　な、なによ、わたしの足なんか大したことないってこと？」
アンジェは目尻を吊りあげたが、ルテアは余裕の笑みで返した。こういうときは不思議と妹の方が優勢らしい。
「ちゅくちゅくっ――はぁ、ルテア、お兄ちゃんそろそろ……」
「はぁ、はぁ、もうびゅーってしちゃう？　じゃあ、おま○こでぱくってしちゃうね」
恍惚の笑みを浮かべたルテアが、フリルミニを床に落として下半身丸出しで歩み寄る。
「うふっ、おちんちんびくんびくんしてるー。食べてもらいたがってるね。じゃあ……ルテアのぬるぬるおま○こで、ぱっくんしちゃうよ？」
兄を床に仰向けにすると、ルテアは裸の腰で跨いだ。
指に開かれた桃色の花弁が、ぱんぱんの亀頭をゆっくりと奥まで飲みこんでいく。
「はぁあ……おちんちん美味しいぃ。おま○このビラビラであまぁい味感じちゃうぅ……」
すっかり腰を落としきると、ルテアはウットリした笑みを浮かべた。心の底から気持ちよさげで、淫魔化しつつあるのか口の端から牙が見えた。
そのまますぐに抽送が始まると、互いの口から小刻みに熱息が漏れてくる。
「はぁ、はぁ、ううっ、ルテアのおま○こ、やっぱりキツいっ……狭くって、きゅうきゅう締めつけてるっ……」

「はぁ、はぁ、お兄ちゃんのおちんちんもだよぉ、中でびくんびくんしてぇ、ルテアのおま○こぐいぐい広げちゃってるよぉ……！」

体格に見合う小振りなおま○こが太長い肉棒に拡張される。筒状な中の粒ヒダたちは、強く擦れあう勃起粘膜に余すところなく捲られていた。

濡れ方が少ないと、きっと痛いくらいだろう。けれど膣内は思った以上に潤っていて、とろとろのぬめりが甘美な摩擦感を生みだしていた。

「はぁ、はぁっ、あうぅん、ルテアのおま○こぉ、お兄ちゃんおちんちんに馴染んできてるぅ……分かるよね、おま○こがおちんちんの形になってくるのぉ……！」

窮屈なぶんだけ変わるのも早いのか、ルテアのおま○こは着実に兄型になりつつあった。そのためか、擦れる感覚が前以上に濃密で気持ちよく感じる。

こみ上げてくる甘い熱感に、真は腰を揺すりながら身悶えた。

「はぁ、はぁ、ルテア、お兄ちゃんもう我慢が……ああもうっ、出そう……！」

「はぁ、はぁ、あはっ、いっぱいだしてお兄ちゃん、子作りザーメン、卵子目がけてどぴゅーってぇ……！」

ルテアの腰使いが次第に激しくなっていく。味わうような緩い動きから、膣肉でしごくいやらしい動きに。そり返るペニスの形に合わせて巧みに粘膜で摩擦してくる。

「はぁっ、はぁっ、あんっ、あんっ、おちんちんびくんびくん、はぁ膨らんでるぅ、出そうになってるぅ、これ気持ちいいよぉ、おっきいのぐいぐい気持ちいいよぉ……！」

出し入れが小さく速くなってきて、ルテアの呼吸も乱れてきた。彼女にとっても激しさは快楽を加速させる。小悪魔な笑みが官能に震え、迫り来る絶頂に目尻が下がってくる。やがてカーディガンの肩口がはだけ、汗の浮く鎖骨とブラのカップが見えてくる。ぷるぷる揺れる巨乳の膨らみ、その艶めかしさにも興奮しつつ、真はとどめの一突きをくれた。

「ルテア、もう出るっ――中に、出るぞっ……！」

「はぁはぁ、いいよぉお兄ちゃぁんっ、出してぇ、妹卵子、お兄ちゃんのオタマジャクシでぷちゅって受精させてぇっ――あふあああイっちゃうううっ！」

――どきゅるるうううっ！　どぷどぷどぷうっ！

膣内射精が始まると同時に、ルテアは歓喜し盛大にイった。淫魔にとって精液は何にも勝るご馳走だという。相性がいい精液ならなおさらだ。

その相性抜群の兄の子種は、淫魔妹には気持ちよくて美味しいらしい。どくどくと注がれる熱液の感触に、笑みさえ浮かべて溺れていた。

「はぁはぁ、お兄ちゃんのザーメン、やっぱり美味しいっ！　もぉやめられないよぉ、お兄ちゃんとの子作りエッチぃ、ラブラブ受精セックスぅ……！」

「っっ～～ルテア、もういいでしょ！　いい加減……その……わたし、も……」

「うふっ、だーめ。まだまだしちゃうんだから、お姉ちゃんはずっと見てるの」

たった今イったばかりだというのに、ルテアはすぐさま肉棒摩擦を再開する。

「ああ待てって、お兄ちゃんまだ出てる途中っ……おおっ!?　なんだこれ、おま○こが、

勝手にしごいてるっ……？」

真は思わず目を疑った。跨がったルテアはまだ動いていない。絶頂の余韻を噛み締めている。なのにペニスは確かにぬるぬるとしごかれている。ザラつく粒ヒダの摩擦感もきゅんきゅんとした心地よい収縮も、ピストン時とほとんど変わらないくらいだった。

つまりこれは、おま○こが独りでに動いているということか。

「はぁ、はぁ、テヘッ、ルテアのおま○こも、もっとほしいっていってるよ？　だってぇ……子作り大好きな淫魔だもん」

どうやら淫魔はこんなこともできるらしい。膣肉だけでしごけるなんて気持ちよすぎるしエロすぎだ。

そのうえでまた腰を振られると、真はもう背筋が跳ねるほどよがってしまった。

「おおうっ！　はぁはぁルテア、すごすぎる、おま○ことお尻が一緒に動いてしごいてきてっ……くぅだめだ、出たばっかりなのに、また出そうなくらい感じるぅ……！」

「うふっ、お兄ちゃんいいよ、何度でもいっぱいびゅっびゅーってしてね？　あんあん、ルテアも気持ちいいよぉ、受精セックス大好きだよぉ……！」

ルテアは背中に羽根を生やして貪欲に腰を振っていく。服はそのままで破れてもおらず、透過して生やすこともできるらしい。

ますます淫魔らしい小悪魔な妹に、真は翻弄されがくがくとわななく。

「なによ二人ともぉっ……わたしだけ除け者にしてぇ……」

そんなときだった。不意にアンジェが近くににじり寄ってきた。
「わたしだって、わたしだって……淫魔、なのよ。こんなの見せられたら……」
その瞳には欲情の炎が燻っていた。色は赤くルビーのようで、淫魔の本能が疼いているのが分かる。
頭元で膝立ちになり、アンジェは白い太腿を見せつける。
「あ、アニキ、ブルマ……見たいっていってたわよね。いいわよ、み、見せてあげる。特別だからね……」
アンジェの全身が突然、淡く光りだした。輪郭がぼやけ、一瞬裸が見えた気がする。その豊満な白い裸体に、小さな粒子が乱舞しながら集まっていく。
やがて光が収まると、彼女の姿は、白いシャツを着た紺色のブルマ姿になっていた。
「すごい、変身したのか？　淫魔ってこんなこともできるんだ」
「そうよ、アニキをカエルにだってできるんだからぁ……」
そんなことを言うアンジェの瞳は、けれどとっくに濡れていた。頬は火照って肌が色づき、官能の雰囲気でいっぱいだった。
それにブルマも思ったより似合ってエロかった。肉感的な太腿の付け根がきゅっと食いこんでいるところとか、生地がぴったり張りつく恥丘のぷっくらとした膨らみ具合とか、絶妙に生々しくてそそられてしまった。
その艶めかしいクロッチの膨らみが、顔を跨いで眼前に来る。

「アニキぃ、おっ、お願い……わたし、もぉ……」
「はぁ、はぁ、アンジェ、ううっ……アンジェ！」
「きゃんっ⁉　あはぁぁあぁんっアニキいいっ！」
真は興奮のままクロッチにむしゃぶりついた。ふくよかな太腿を両手で抱え、頭を振って付け根を刺激する。妹もまた濡れていたのかサラサラの生地はじっとりと温かかった。
「やん鼻ぁ！　ぐりぐり当たってっ、ああん舌感じちゃうぅっ！　舐められてるぅ、ブルマのアソコ舐められちゃってるのぉっ！」
「ふーっふーっ、はあアンジェのココ、いやらしいにおい、すごいするっ！　まだ精液ほしがって……ああ堪んない、にっ、妊娠させたくなるっ……！」
「いわないでぇ、恥ずかしいっ、こんな格好しておねだりするなんてぇっ……ああんでも感じちゃううっ！」
「はぁはぁ、お兄ちゃぁん、ルテアも気持ちいいよぉ、腰動いちゃうっ、おま○こ動いちゃうっ、おちんちんとザーメンでイってデキたいよぉっ！」
「ふーっふーっ、ルテア、お兄ちゃんもだぁっ！」
——じゅるじゅるずるずるずるぺちゅくちゅぺちゅくちゅっ！
——ぱんぱんぱんぱんぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ！
真は夢中でクロッチをしゃぶり、強くおま○こを突きまくった。鼻にくる性臭と肉棒の愉悦に、我を忘れるほど燃えあがっていた。

そして妹たちも、熱烈なクンニと勃起ピストンに腰をくねらせて淫らによがる。
「ひぃん、ひぃんっ！　あっアニキぃ、だめぇ、エッチなお汁っ、啜らないでぇっ！　どんどん出ちゃう、どんどん感じちゃうのぉっ！　――こんなんじゃわたしぃ、アニキにっ、あんっ、大好きなお兄ちゃんにぃ、いっぱいぎゅってしてもらいたくぅぅん……！」
「はあっはあっルテアもぉ、お兄ちゃんにぎゅってしてもらいたいよぉ！　大好きだもん、本気ラブだもん、いっぱいエッチして受精して、ボテ腹デキ婚しちゃいたいよぉっ！」
いつしかアンジェは甘い台詞を織り交ぜ始めた。喘ぐ表情は可憐で愛らしく、恋する乙女心と甘い愛欲が見え隠れする。ルテアは逆に素直になってきて、普段以上の兄ラブっぷりと子作り意欲をあらわにした。
そんな二人の淫魔妹に、真は昂るまま叫んだ。
「はぁはぁ、アンジェ、ルテアっ、お兄ちゃんも大好きだっ！　――愛してる！　ぜったい孕ませてやるからな！　ちゅるるる～～っ！」
「「はあああおにいちゃあああんんっっ！」」
二人の嬌声が見事にハモって響き渡った。
愛の告白が効いたのか、二人は同時に絶頂していた。アンジェはクロッチを熱烈に啜られて。ルテアは膣奥を強く突かれて。揃ってわななき、ぴーんと背筋を弓なりにする。
と同時に、真も肉棒の甘美な痺れに身を任せた。
――びゅびゅるるるぷぷううっ！　ぷぷっぷぷっどぷぷっ！

外だからだろう。
　恥じらいの仕草にときめきながら、真はパジャマの前を開き、純白のブラに手を添える。
「ブラも白なんだな。似合うよ、レースがついててすごく綺麗だ」
「り、リボンが白だから……アニキ、こっちの方が好きみたいだから……」
　以前のショーツもやっぱりそういう意図だったのだ。口うるさくて世話焼きだが、実は男に尽くすタイプに違いない。
　そう思うと嬉しくなり、ブラを脱がす手にも優しさがこもる。
　――ぱわっ、ぷるるるんっ。
　肩紐をずらしてカップを下げると、青白く光る美しい丸みが夜空の下に現れた。
「綺麗だ、アンジェ。大きくて柔らかそうで、すごい素敵だ……」
　真は改めて妹の爆乳に見惚れた。
　天使のバストも大きかったが、サイズも魅力も段違いだった。目の前のバストは大玉スイカほどもあり、圧倒的な量感に今でも目を見張る。豪快なロケット型は、けれどまろやかな丸みを持っていて、色気だけでなく芸術的な美しさがあった。
　その魅惑のスイカップに手が触れると、アンジェは切なげな眼差しを浮かべる。
「はぁ……アニキの手、やっぱり、優しいっ……んぁっ、緩く、揉み解してぇ……」
「柔らかい……あったかいよアンジェのおっぱい。揉んでるだけで惚れ直しそう」
「はぁ、そんなこと、いいながらなんてぇ……あはぁ……！」

手すりに背もたれながら、アンジェは官能に小さく鳴く。兄しか知らない初心な身体は、早くも肌を淡く染めて甘やかに熱をあげつつあった。

スイカップの先の薄いピンクを、兄の唇がそっと啄ばむ。

「んあっ！　アニキぃ、吸っちゃだめぇ……！　あっ、そんな、乳輪ぺろぺろとぉ……」

敏感な箇所を優しく責められアンジェは声を悩ましくした。乳輪もかなり弱いようで、薄い縁を優しく舐めると内股がぴくぴく震えだす。

真はその内股の付け根にも指を伸ばし、寝間着越しにゆったりと陰部を刺激した。

「いやぁ、はうっ、指で押しちゃ……あんんっ！　アソコ、火照っちゃう……疼いて、お、おちんちん、ほしくぅ……」

「ちゅぱ、ちゅぷっ——俺もほしいよ、アンジェのココ。妹な嫁さんと、エッチしたい」

「よ、嫁、なんてぇっ……そんなこと、いわれるとぉっ……！」

赤みを帯びてきたつぶらな瞳が恥ずかしげに閉じられる。言葉でも昂るのか、熱っぽいクロッチがきゅん、と動いた感じがした。

真もほしくなりこのまま入れたくなったが、朝のことを思いだして、もう少しおっぱいを味わうことにする。

「アンジェ、パイズリしてくれないか？　俺、アンジェのおっぱいでもっと感じたい」

初めてのパイズリは反応こそしたが嬉しくなかった。あんなものがパイズリだなんて思いたくもない。恋人との本物のプレイでいやな記憶をリセットしたかった。

「……もう、エッチなんだから」
少し驚いた表情をしたが、アンジェは素直に膝をついてくれた。
兄がズボンをさっとおろすと、愛欲で硬くそり返った逞しい肉棒が飛びでてくる。
その牡肉におっぱいを寄せて、アンジェは悩ましい吐息を漏らした。
「はぁ、すごく大きい……は、挟むわよ。初めてだから、上手くなくても我慢してよね」
ほんの少しの強がりと共に、深い谷間がサオを包みこむ。唇が薄く開いて、唾液をゆっくりと間に流しこむ。
そしてぬめりを得たおっぱいが、少しずつ上下に動き始めた。
「おぉぉ、これがアンジェのパイズリっ……柔らかくって、き、気持ちいいっ……！」
いかにも不慣れな仕草だったが、真はすぐにも愉悦を覚えた。
ダイナミックな形ではあるが、アンジェのおっぱいは見た目に反して柔らかい。質感はまるでもちもちのパン生地で、形を変えながらしっとりとペニスに吸いついてくる。そのうえ谷間は程よく熱く、快い熱感と摩擦感覚が肉棒にじわじわと沁みていった。
「あぁ、はぁ……ほ、ほんと？　こんな風でいいの？　わたし、よく分からなくって……」
「うん、ほんと気持ちいいから。あいつらなんかより断然いいって」
「な、なによ、天使にパイズリなんてされたの？」
「う、うん。でもちっとも気持ちよくなかった。アンジェの足元にも及ばないって」
「ふん、どうだか」

唇を尖らせ睨んだものの、まんざらでもない様子だった。女として勝ったという優越感を覚えたのだろうか。

アンジェは谷間をきゅっと締めると、少しピッチをあげてくる。

「んっ、んんっ、そんなに気持ちいいなら、もっとしてやるんだから。あんな連中、忘れちゃうくらい……！」

「ううっ、あ、アンジェ、お前、嫉妬して……」

「ふん、あはぁ……アニキの精液は、わたしたちのなんだからねっ」

思わず腰が震えた兄を、アンジェは挑戦的に見上げた。対抗意識をむき出しにして、なおもおっぱいを揺すってくる。

「ううっ、ま、待ててアンジェ、誤解だ、無理やりされただけで浮気とかじゃ……！」

「んんっ、んんっ、別に、怒ってなんていないわよ。アニキがパイズリされようと、おま○こに入れられようとっ」

言葉とは裏腹に、態度は嫉妬心丸出しだった。惚れた男を虜にしたい。自分の方だけ向かせたい。そんな女心が見え隠れする。

ぬちゅタプと揺れ弾むおっぱいの間で、肉棒は痺れ、びくびくと血管を脈打たせ始めた。

「はぁ、はぁ、だめだアンジェ、すごい気持ちいいからっ、で、出ちまうっ……！」

「いいじゃない、んんっ、いっぱい出しちゃえばっ」

最初の不慣れさがうそみたいにアンジェはパイズリをしていった。添えた両手を小刻み

に振っておっぱいの動きをどんどん速くし、柔らかいお肉ですりつぶすみたいにペニスをむにゅむにゅとこね回す。おっぱいを軽く交差までさせて、不規則な刺激まで加えてきた。

その摩擦快楽は天使の比じゃなく、しごかれるたび勃起神経がじくじくと疼いて沸騰していく。腰を引こうにも妹の爆乳は前後にも動いて刺激してきて、逃げ場もないままぐんぐん熱感をこみ上げさせられた。

兄が限界に膝まで震わせると、アンジェは谷間の亀頭を見下ろす。

「んっんっ、ほらぁ、出しちゃいなさいよっ、顔で受け止めてあげるから。アニキのいやらしい精液、浴びてあげるからぁ……！」

「はぁはぁ、アンジェっ——分かった、出すぞっ、顔にかけるぞっ！」

——っっびゅびゅうううっ！　びゅっびゅっ、びちゃっびちゃっ！

恋人の胸に責められるまま、真は谷間で放出していた。柔らかおっぱいは本当に気持ちよく、わざわざ顔射させてくれるのも嬉しかったし興奮した。

「はぁぁあんんっ……アニキの、精液ぃ……いっぱいかかって、あったかい。甘いにおいでいっぱいぃ……」

俯くアンジェは文字どおり顔中で樹液を受け止めた。ウットリと目を閉じ唇を開けて、口内にまで受け入れていた。

「ん、ちゅるっ——はぁ、美味しい……舌、蕩けちゃうぅ。ほんとに精液、素敵ぃ……」

相性抜群の兄の子種は美味で堪らないのだろう。口に溜まった熱い粘液を、彼女はじっ

くり味わってから飲みこむ。
その白く汚れた恍惚の笑みは、とても妖艶で大人びて見えた。
「アンジェ、はぁぁ、今の顔、すごいいやらしい……マジで淫魔って感じする……」
普段とのギャップが余計にそう思わせた。今やアンジェは本気で精液の味に酔っている。残り汁まで搾りだそうと、まだおっぱいを小さく揺すっている。心の底からウットリとしたその悩ましい表情は、生真面目な少女とは思えないくらい扇情的なものだった。
そんな素顔を見ているだけで、出したばかりの痺れる肉棒に新しい熱が追加されていく。
「はぁ、はぁ……ふん、まだこんなにして。ほんと、いやらしいんだから」
硬くそり返ったままのペニスを、アンジェはツンとして見下ろす。けれどその目には、きちんと恋人を満足させられた安堵の色が浮かんでいた。
「どうする？　もう一回、胸でする？　どうしてもっていうならしてあげるけど……」
「はぁ、はぁ……ううん、もういい。出すのはやっぱり、アンジェのおま〇こがいいから」
膝立ちの彼女をそっと立たせると、真は耳元で囁いた。
「アンジェが好きだから。愛してるから。結婚して、俺の子供、産んでほしいから」
「ばっ――バカっ。そんな風にいわれたら……こ、子作り、するしかないじゃない……」
言われたアンジェは、耳までまっ赤になって目を伏せた。
ここまできておいて、また恥じらっているらしかった。本気すぎる恋人の求愛に、肩を抱いてもじもじしている。そのくせ本音では喜んでいて、抱いてほしそうな甘い雰囲気が

しっかり全身から滲みでていた。
初々しい妹の反応に、真は改めて愛欲を掻き立てられる。
「仕方ないわね、い、入れさせてあげる。特別よ、子供ほしいなんていうから……」
そう言ってアンジェは兄の部屋に行こうとする。ベッドでエッチする気なのだろう。
けれど真は、彼女の身体をさっと抱き寄せ寝間着のズボンに指をかけた。
「えっ、ちょっとアニキ、やっ――あん、脱がせちゃ、いやぁ……」
「アンジェ、俺、ここでしたい。ベッドまで待てないんだ」
「そんな、ここじゃ誰かに見つかっちゃうかも――ああいやぁ、パンツもぉ……」
ズボンをおろして足から抜くと、続けてショーツもするりとおろした。リボンと同じ純白のそれは、透明な蜜が沁みこんでいてクロッチが細い糸を引く。しっかり濡れたピンクのラビアは、もうオッケーよと言わんばかりに淡く煌めいてヒクついていた。
「アンジェももうびしょびしょだ。子作り……したいんだな」
「そ、そんなことぉ、いわせ、ないでぇ……」
「どうして？　アンジェのエッチな本音とか、俺すごく聞きたい」
ほんの少しの仕返しもこめて、真はじっくりとラビアを視姦した。濡れた入り口は視線に恥じらい、小陰唇をきゅん、と窄ませる。だが蜜はより多く溢れ、可愛い真珠もぷくっと勃起し包皮から顔を出してしまっていた。
真は下から覗きこみつつ、両手の指でくちゃっと入り口を左右に開く。

「ああいやぁ、広げないでぇっ……視線っ、奥まで感じちゃうぅ……！」
「俺もすごいどきどきする。アンジェの下の唇、ほしそうに開いてすごいエロい……聞かせてくれよ、アンジェの本音。したいって気持ち、すごく聞きたい」
本当はすぐにも入れたかったが、ぐっと我慢して質問責めする。
するとアンジェは、羞恥に小さく身震いしながら答えた。
「はぁ、はぁぁ……し、したい、の……アニキと、子作り……いっぱいしたい。美味しそうな素敵なおちんちんで、ぐ、ぐちょぐちょのおま○こかき回されたいぃ……！」
赤い顔にはまだまだ困惑が残っている。愛欲に素直になることに、まだ抵抗がある証拠だ。それでも眼差しは興奮に蕩け、奥深い結合と愛の種付けを求めていた。
「お願い、もう、いわせないでぇ……アニキ……お、お兄、ちゃん……！」
おまけにスイッチが入ったらしく、急に可愛らしい口調になる。見ればお尻に尻尾が生えて、背中には羽根が広がっていた。
「お兄ちゃんと、え、エッチ、したいのぉ……お願い、いっぱい妊娠させてぇ……妹おま○こ、赤ちゃん孕みたいのぉ……！」
「アンジェ、おねだり、すごい可愛いっ……！　お兄ちゃんもだ、アンジェのおま○こラブザーメンで孕ませたいっ！」
真は辛抱堪らなくなって、背後から妹に抱きついた。手すりに両手をつかせ、豊かなヒップを後ろに突きださせる。そのうえで左足を抱えこみ、陰部を盛大に開かせた。

そして間髪容れず、太い肉棒でバックから貫く。
「あはああんっ！　すごいっ、すごいのぉっ、大きいのきてる、おま〇こに深くうっ！」
途端にアンジェは歓喜の声をあげ、腰をびくびくとわななかせた。
「気持ちいいっ、やっぱりすごいのぉっ！　おちんちん美味しい、おま〇こ悦んじゃってるぅっ……子宮もきゅんきゅんして、精液、ほしがってるのぉ……！」
「アンジェ、そんな大声だして、そんなに嬉しいのか？　お兄ちゃんと子作りエッチ」
「はぁ、はぁ、嬉しい、アニキ、ううん、お兄ちゃんとの子作りエッチ、嬉しいのぉっ……あんっ、びくってしてるぅ、深いとこ抉ってるぅ、この形と味っ、好きなのぉぉっ……！」
蕩けきった甘い鼻声がアンジェの口からどんどん出てくる。焦らしと言葉責めが効いたのか、すぐ快感に溺れている。入れてまだ間もないのに豊かなヒップがぷるぷる揺れて、はだけた肩は熱息にあわせて小刻みに上下していた。
しかも彼女は、早速甘えモードでおねだりしてくる。
「お願いお兄ちゃん、好きぃ、大好きぃっ……なかなか素直になれないけれど、すぐヤキモチ焼いちゃうけど、アンジェほんとは、ずっとずっと好きだったのぉっ……！」
「アンジェ、俺もだ。ほんとはずっと惚れてた……！」
「お兄ちゃん、キスしてぇ、ラブキスぅ……んっ、くちゅるるっ……！」
繋がったまま二人は肩越しにキスをした。舌を伸ばして何度も絡めあい、唾液をたくさん交換する。薄い酸味とほのかな甘味が脳髄をじんじん刺激した。

やがて二人は本能のまま、激しく腰を揺すり始める。
「んっんっんっんっ！　くちゃっ、おにいちゃぁん、あはぁ嬉しい、ぱんぱん嬉しいっ、はあんラブセックス気持ちいいのぉんっ！」
「俺も気持ちいいよ、ぬるぬるおま○こウネウネして……堪んない！」
夢中で抽送を繰り返しながら真は官能に打ち震える。アンジェのおま○こはやっぱり柔らかく、とろとろの粒ヒダの吸着感が何度味わっても堪らなく気持ちいい。締まり具合も天使とは雲泥の差で、ひと擦りするたびに媚電が走って熱感の上昇を止められない。
その蕩けた膣奥を小刻みに突くと、濡れた子宮の柔らかいお口が亀頭にちゅうっとキスをしてくる。
「あああんソコいいのおっ！　当たるのいいのぉ、子宮にキスっ、感じちゃうのおっ！」
「はぁはぁ、キスしてるのはアンジェの子宮だよ、もう降りてきて、なんてエッチっ……！」
「いやぁんいっちゃだめぇ、いじわるぅ、お兄ちゃんのいじわるぅんっ！」
そこが一番感じるみたいでアンジェは大いによがって鳴いた。口調はますます可愛らしくなり目尻もトロンと落ちきって、恋人同士の子作りの悦びを一心不乱に味わっていた。
官能に波打つその背中を見て、真も興奮に息が弾む。再びこみ上がる熱塊の感覚に肉棒がぎちぎちと軋みをあげる。
次第にピストンが速くなって尻肉が間断なく弾けてくると、アンジェも呼吸を一層乱して汗と蜜を散らし始めた。

「あんあんあんあんすごいぃん！　お兄ちゃん激しいっ、アンジェイっちゃうううっ！　子宮にキスどんどん強くなってぇ、ああん開いちゃう、子宮開くぅん！」
「はあはあ、分かるよアンジェ、こりこりしたとこ少しずつ開いて……先っぽにくっついて離れないっ！」
おま○こだけでなく子宮まで動いているみたいだった。抜くときにまで入り口が吸いつき、亀頭をかぷっと咥えこもうとする。およそ人間のおま○ことは思えない感覚だった。
激しい快楽に溺れながら、改めて妹が淫魔だと実感する。こんな快感、人間の女性ではきっと味わえない。子宮と膣で味が分かるのも多分本当なんだろう。
前にも増して美味そうにしゃぶる官能的で甘美な蜜壺に、真は心から酔った。
「はあはあアンジェ、すごい気持ちいいっ……もう俺っ、出るよ！　どこに出したらいい？　お尻か？　背中か？　それともまた顔か？」
「はあっはあっ、いじわるぅ、わかってるくせにぃん！　中ぁ、中に出してぇっ、お兄ちゃんの子供、恋人の赤ちゃん、淫魔おま○こに男の子ほしいのおっ！」
半目になったエロい表情で、アンジェは肩越しに振り向き、おねだりしてくる。
「お兄ちゃん好きぃ、好き好き大好きぃっ——あまぁい精子で孕みたいのぉ♥」
「⁉　アンジェ、すごい可愛くてエロい台詞っ——イクぞ！　今夜こそ妊娠させてやる！」
「あはあお兄ちゃん嬉しっ——はあぁくるうっ！　精子オクにいっぱいくるううっ！」
——どぱあああああっ！　どぱどぱどぱどぱっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! キルタイムコミュニケーション 検索